
伊四 -為せる全てを-

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伊四 - 為せる全てを -

【Nコード】

N5262F

【作者名】

流水郎

【あらすじ】

ウルシー環礁を目指す『潜水空母』……伊号第四 潜水艦。鉄の棺桶に宿った1人の少女、そして鉄の鳥を駆り戦う武士たち。時代が日本に迫り来る中、それでも彼らは戦場へと赴く。その先にあるものは……？

一、彼女との出会い（前書き）

初めての、本格的な艦魂小説です。
おそらく4話くらいで終わると思います。

一、彼女との出会い

- 艦魂 -

- 海を征く者達の、棺に宿る魂にして、守護者 -

- 人の心を持った兵器は -

- 美しくも悲しき、戦乙女 -

… … …

言うまでもないが、潜水艦の中は空気が悪い。

何せ完全に密閉されているのだから湿気が籠もるし、食べ物など放つておけば数日でカビが生える。

おまけに風呂にも入れない。

この伊号第四〇〇潜水艦も、それは同じだったが、人の慣れとは恐ろしい物だ。

俺も今では、悪臭の満ちた艦内で鼻歌を歌えるほどに成長した。

「おい、鍋木」

後ろから声をかけられて振り向くと、そこにいたのは神崎中尉だった。

「これは中尉。お疲れ様です」

「ご機嫌そうじゃないか」

「はあ、別に機嫌がいいわけではないですが」

神崎中尉はいつも笑っていて、軍人らしからぬ飄々とした雰囲気を持つ人だ。

しかし左足を失いながらも、義足をつけて戦線に復帰した強者でもある。

「大分慣れてはきたが、早くウルシー環礁に着いてほしいぜ」

「俺もですよ。景気よく空飛びたい……」

……俺たちは飛行機乗り。

本来なら、潜水艦トンガメとは逆の世界で戦う生き物。

この戦が始まるずっと前から、水上偵察機を搭載する潜水艦はあった。

日本では零式水上偵察機を1機搭載可能な、伊一五型潜水艦などがそれだ。

その発展型が伊四〇〇型潜水艦……「潜水空母」。

全長108・7メートル、排水量2・230t、水中では3・700t、そして理論上は地球一周半に相当する、長大な航続距離。今の時点では、史上最大の潜水艦だろう。

そして、偵察機ではなく攻撃機を3機搭載しているわけだ。

神崎政次中尉は、その艦載機『晴嵐』の隊長。

俺…… 鍋木四郎はその後部座席担当。階級は少尉だ。

「ま、どの道……」

言いかけて、神崎中尉は口をつぐんだ。

何を言おうとしたのか、何となくわかった。

当初パナマ運河を攻撃する予定だったこの伊号第四〇〇潜水艦は、艦載機の開発が遅れたこともあり、作戦目標はウルシー環礁に再設定された。

だが現在、太平洋の制海権・制空権は連合軍が握っている上に、米軍の対潜装備は相当なものだ。

伊五八潜水艦が敵艦を魚雷で沈めてから、強力なレーダーを搭載した対潜哨戒機を使い、厳重に海域を警戒している。

ましてや、艦載機の発進時には嫌でも浮上しなければならないし、搭載している攻撃機も3機だけで、護衛もいないのでは、戦果を挙げられるとは思えない。

だが、それでも俺たちは軍人なのだ。

徴兵された連中と違って、好きで戦場に出た以上、どんな死に方をしようと文句は言えないのである。

俺は自分の額の傷をさすり、ふと溜め息を吐いた。

……夜に浮上して外の空気を吸っていたとき、近くの下士官たちが妙な噂話をしていた。

「聞いたか？ ネズミが出るって」

「ああ、なんでまた、こんな潜水艦にまでなあ」

「けど、大地震の前にネズミが逃げ出すとか言うだろ？ ネズミが乗ってるってことは、この船は沈まないんじゃないか？」

「はは、かもな」

俺がぼんやりとそれを聞いていたとき、神崎中尉が俺の肩をポンと叩いた。

「鍋木、お前はあの噂、どう思う？」

「どう思っ、って言われましてもねえ」

「なあ、俺と一緒に、ネズミを捕まえてみないか？」

「はあ！？」

「な？ ウルシーに着くまで暇だしよ、気分転換にさ。俺、小動物結構好きなのよ」

……この人は本当に、何を考えているのやら……。だがいつ死ぬかわからない身だ、思い出作りくらいしておこう。

「……わかりました。で、どうやってとっ捕まえるので？」

「それはだな……」

中尉は右手の人差し指をピンと立てた。

「……罠を仕掛けるのさ」

……中尉の指示の下、俺はネズミが出ると言われる辺りに、罠を設置した。

そして自分は、曲がり角に隠れている。

まず床に乾パンが置いてあり、それに細い糸をくくりつけてある。ネズミが乾パンを見つけたら、糸を引っ張っておびき寄せ、とっ捕まえるわけである。

「……戦闘機乗りつてのは、エリートのはずなんだが……」

生まれて初めて、自分の存在に疑問を持った。

近くを通りかかった乗組員からは、「よっぽどお暇なのですね。羨ましいです」と、思いつきり嫌味を言われてしまった。

母さんが知ったら泣くな、こりゃ。

そんなこんなで待つこと30分、神崎中尉がやって来た。

「よお、まだかからないか？」

「……はい、まだですね。そろそろ寝たいのですが」

「そうだな、俺が代わろう」

どんだけネズミを捕まえたいんだか。

……が、しかし。

「！？」

俺は自分の目を疑った。

艦の廊下を、女が歩いていたのだ。

歳は18くらいだろうか、美貌の中に子供のあどけなさが残っている。

そして、何か不思議な雰囲気を持っていた。

うつすらと、柔らかな光を纏っているような……

「か、鎚木……あれは……」

神崎中尉が囁く。

中尉も、その少女の姿に驚いているようだ。

「女が……なんで潜水艦に……？」

俺は小声で尋ねてみた。

「うむ、もしかしたら妖怪かもしれない。化け狐とか」

「なんで潜水艦の中に狐が出るんですか？」

「それはわからん。だが、狐以外に考えられないだろう、こんなところになんて」

確かにそうだ。

それにあの少女は、どうも人間とは思えない。
足があるのだから、幽霊とも違うだろう。

「ネズミ取りがキツネ取りになったぞ。眉毛に唾つけとけ」

「了解」

……少女は罨を訝しげに眺め、屈んで乾パンに手を伸ばした。
俺は、くいつと糸を引き、乾パンを引き寄せる。

少女はあたふたと、乾パンを追いかける。

神崎中尉に目配せをし、俺はどんどん糸をたぐり寄せた。

そして乾パンを追う少女が、俺たちの目の前まで迫ったとき……

「とりゃあ！」

「きやう！？」

神崎中尉が、片足が義足とは思えないほどの俊敏な動きで少女に飛びかかり、背中から腕を固めて押さえつける。

「どうだ化け狐、観念しな！」

「痛たたたた！！！」

少女は藻掻く。

「中尉、手加減を！」

「おつといけねえ、興奮しちまった。女の子の柔らかい感触に」

……危ないよ、あんた。
ここは俺が尋問しよう。

戦闘機乗りの品格を落とさないために。

「乱暴な真似をして悪かった。あんたが何者なのか、教えてもらいたい」

「……………」

少女は中尉の束縛から抜け出し、丸い目で俺をじっと見ていたが、やがて口を開いた。

「『晴嵐』搭乗員の……人達ですよね？」

「俺たちのことを知ってたのか？」

「…………この艦に乗っている人は、全部知ってます……………」

「ほうほう、随分前から憑いてたわけか」

神崎中尉が口を挟む。

「つ、憑いてたって……私は妖怪とか、そついうのじゃありません……………」

「ってことは、化け狐じゃないわけか？」

少女が抗議したので、俺は訊いてみる。

「当たり前です！……私は、この艦の艦魂です」

艦魂……

聞いたことの無い単語だった。

「なっ……艦魂……だと？」

神崎中尉は驚愕の表情をしていた。
何か知っているらしい。

「そうか……艦魂……まさか実在したとは……」

「中尉、艦魂とは一体……？」

俺は尋ねた。

「艦魂ってのはな……海の中から現れて船縁にしがみつき、船乗りに向かって『柄杓ひしゃくをくれ』と言ってくる……」

「ち、違います！！」

少女が猛烈に抗議する。

ちなみに、神崎中尉が言ったのは多分『船幽霊』って奴だ。

死んだ船乗りの魂って話だが、要求通りに柄杓を渡してしまうと、その柄杓で船の中に水を汲み入れられ、船は沈められてしまう。だから底の抜けた柄杓を渡すのがいいらしい。

「あつ、間違えた。道行く人に微笑みかけ、その美しい姿に見とれた男は、釣り針の付いた長い髪の毛に絡め取られるという……」

「それも違いますっ ！」

今度のは多分、妖怪『針女』だろう。
そのまんまの名前だな。

とにかく、このままではキリがない。
しかも少女は泣きそうになっていた。

「艦魂ってなんだ？ お前さんの口から説明してくれ」

「……分かりました。確か…… 鎚木さん、ですよ ？」

「ああ、そうだ。鎚木四郎、階級は少尉」

「では、鎚木少尉にだけ教えます」

少女は言った。

「えっ、じゃあ俺は？」

「貴方には…… 教えたくありません」

神崎中尉は完全に嫌われてしまったらしい。

この人は昔から妖怪とか、その手の話が好きだったが、今回ははしやぎすぎだろう。

「じゃあ鎚木少尉、向こうの方へ行きましょう……」

「ああ」

俺と彼女は神崎中尉を置いて、誰もいない方へ移動する。

中尉は何となく寂しそうだったが、自業自得だから反省してもらおう。

「……で、艦魂とは？」

「艦魂とはその名の通り……あらゆる艦船に宿る魂にして、守護神です」

少女は小さな声で、そう言った。

つくもがみ
付喪神の類か？

だが言うと怒るかも知れないから止めておこう。

「で、お前さんがその艦魂ってことか？」

「はい。……信じて、くれるのですか？」

「そりゃ、軍隊の潜水艦に女が乗っているとくれば……人間とは思えないしな」

俺がそう言つと、彼女は「そうですね」と、少し笑った。

「私たち艦魂は、戦艦、空母、巡洋艦、輸送艦、あらゆる船に宿るのですが、私たちの姿が見える人は限られています。私も見える人と会ったのは、初めてです」

「つまり、俺と神崎少尉は、見える人間ということか。何度か船に乗ったことがあるけど、会ったことはないな」

「はい、元から見えなくても……何かの拍子に見えるようになったりするんです」

何かの拍子に……

思い当たる節があったので、話題を変えることにした。

「お前さんの名前は？」

「え、名前……ええと……伊号第四〇〇、でしょうか」

少女はおずおずと言った。

「もうちょい、人間的な名前は無いのか？」

「それは……ありません」

そりゃそうか。

自分の姿が見える人間がいなければ、名前をつけてくれる人もいないだろう。

いくらなんでも「おい、伊号第四〇〇」とか呼ぶ気にはなれない。

「よし、俺が名前を考えよう」

「えっ……摘木少尉が……？」

「ああ、それなりに教養はあるつもりだし。いいか？」

「……はい、お願いします」

彼女が微かに笑って頷いたので、俺は「女の子」と「潜水艦」の両方を踏まえて考えてみる。

「……………絹という字に海と書いて、絹海^{きぬみ}、ってのは？」

「絹海……………」

「絹って字は、左側に『糸偏』、右上部は『蚕』を表し、その下に『月』という字がある。つまり、『月明かりに照らされて、より美しく輝く糸』という意味だ。お前さんの雰囲気に合わせていると思うけど」

「月明かり……………美しく輝く……………」

彼女はそう呟いた後、嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます、その……………凄く気に入りました！」

「そうかそうか、よかった。これから、宜しくな」

「はい、宜しくお願いします！」

絹海は、俺にペコリと頭を下げた。

こんな鉄の塊……………兵器に宿る魂が、このような少女だとは。皮肉なもんだ、と神崎中尉なら言つかもしれない。

俺もそう思ったが、口には出さなかった。

⋮

一、彼女との出会い（後書き）

鎚木四郎

帝国海軍少尉で、本作の主人公 兼 語り部。

戦闘機乗りとしては背が低い他に、額に傷があるのも特徴。
温厚な人柄。

神崎政次

帝国海軍中尉で、鎚木とペアを組む『晴嵐』搭乗員。

左足が義足。

職業軍人らしからぬ、子供のような性格だが、その実力は……？

さて、第一話でございます。

絹海についての紹介は、次回に載せます。

実在した潜水艦ですが、結構オリジナル要素が入るかも知れませんが……。

一、 激戦の記憶、そして誓い（前書き）

第二話でございます。

二、 激戦の記憶、そして誓い

8月14日。

攻撃目標であるウルシー環礁に近づいてきた。

環境の悪い潜水艦での長旅だったが、『晴嵐』隊員は全員、健康状態に問題無し。

後は無事にウルシー環礁を攻撃して、日本に帰れるか……。

「あつ、鍋木少尉！」

絹海が俺に駆け寄ってきて、手に持ったあやとりを見せた。

「ほらっ、『二段ばしご』ができるようになりました！」

「おう、やっぱり上手いな、絹海」

潜水艦の中でも、日々の訓練は欠かさない。

そして訓練を大体終えた後は、絹海にあやとりを教えている。

絹海はこのような遊びをやったことが無いらしく、いつも大喜びだ。本来ならこのウルシー環礁攻撃計画は、姉妹艦である伊号第四〇一潜水艦と共に行うことになっていたが、合流ができず、個別に行うこととなった。

元々極秘に開発されていた艦でもあるし、俺たちと会うまではさぞかし孤独だったことだろう。

今では最初に会ったときよりも、明るい性格になってきた気がする。

「次は、お手玉でもやってみるか？」

「はい！」

絹海は嬉しそうに、赤いお手玉を二つ取り出した。

これも艦魂の力らしく、簡単な物なら手元に『現す』ことができるという。

「…… 楠木少尉は男の方なのに、どうしてこういう遊びが得意なのですか？」

「あー、それはな、威張れた話じゃ無いんだが…… 俺って結構色白で、背も低いだろ？ 子供の頃は割と体も弱い方で、周りの男子からはいつも仲間はずれにされてさ、いつも女の子と遊んでいたんだ」

「そうだったんですか」

「それでも飛行機乗りになりたくて、体鍛えて海軍に入ったけどな。兄貴達もびっくらこいてたよ」

その兄貴達も、陸軍兵士として中国戦線へ赴き行方不明。

飛行機乗りという、普通に考えれば一番早死にするはずの俺が、未だに生きている。

いつまで続くかわからないが、と、そんな時。

「よう、お二人さん」

「あ、神崎中尉、どうも」

絹海は神崎中尉の顔を見ると、ツンと顔を逸らした。
神崎中尉曰く、「そんな彼女もまた可愛い」とのことだが……。

……俺も中尉と同意見だ、実は。

「あやとりに、お手玉……上手いねえ、こっぴつの」

「これも所謂、昔取った杵柄ですよ」

俺は絹海が出したお手玉を、ホイホイと投げる。

「『晴嵐』の様子を見てきたんだけど、やっぱり綺麗だな、あの機体は」

「ええ、確かに」

艦載機である特殊攻撃機『晴嵐』。

特殊攻撃機と言っても、所謂「人間爆弾」ではなく、フロートのついた水上攻撃機だ。

爆弾か航空魚雷を搭載し、敵艦を水平・急降下爆撃、或いは雷撃する。

潜水艦に積み込めるよう、主翼や尾翼を小さく折りたたみ、艦が浮上したらフロートを装着して発艦するという構造だ。

その流線型の機体は確かに美しく、神崎中尉が惚れ込むのも当然だと思う。

「なんか、小島兄弟の様子がおかしくてな。『晴嵐』の前でばーっとしてるんだよ、いつまでも」

「ああ、あの2人……空襲で家族全員亡くしたらしくて、それからずっと鬱ぎ込んでいますね」

小島兄弟は、『晴嵐』2番機の搭乗員だ。

兄・景太が操縦、弟・正次が航法担当で、腕は2人とも悪くない。家族を亡くしたという知らせが入るまでは、冗談好きの明るい兄弟だった。

「そうか……どうしたもんかねえ、あの様子じゃ、空に上がったとき危ないな」

「2人とも経験は豊富ですし、大丈夫でしょう。ちゃんと切り替えていきますよ」

「そうだいいが……。さて、少し寝てくるわ。じゃ！」

そう言って、神崎中尉は立ち去った。

「……何しに来たんでしょうか？」

絹海は、まだ妖怪呼ばわりされたことを根に持っているらしい。

まあ、無理もないが。

「あの人、子供の頃から妖精とかに会うのが夢だったそうだ。絹海に会ったときも、本気ではしゃいでいたんだろう。許してやってくれよ、本人も前に謝ってたし」

「でもあの人、なんかいつも不真面目で、軍人らしくないです……私たちはお国のため、天皇陛下のために、命を賭けて戦う武士のはずなのに！」

どうやら根に持っているだけでなく、かなり気に入らないらしい。

「嫡木少尉だって、そう思いませんか？」

「確かに、何を考えているのかわからん人だが……俺はあの人の凄さを知っている」

「凄さ？」

絹海は怪訝そうな顔をする。

「ああ。フィリピンでの話だ」

……

あの夜俺は、中尉の操縦する『瑞雲』の後部座席に乗っていた。
『瑞雲』は水上偵察機ということになってはいるが、偵察のみならず急降下爆撃も可能で、さらに20mm機銃と空戦フラップまで装備されている。

その時も両翼下に60kg爆弾を搭載し、米軍の艦艇を探していた。

「……おっ！」

隊長機が艦隊を発見したらしく、翼を振って誘導しはじめた。

俺達も後に続く。

俺は下方をじっと見ると、真っ暗闇の中に不思議な光が見えた。
夜光虫の光だ。

その光の中、紙を切り抜いたように、米軍艦の姿が浮かび上がっていた。

爆撃から逃れるために灯火管制を敷いても、あのような微生物の出す光まではどうにもならない。

「見えました！ 下方に敵艦隊！」

「ああ、よく見える。行くぜ、鎬木」

「はい！」

米軍が気づいて反撃する前に、爆弾を投下する。

フロートの支柱に取り付けられたダイブ・ブレーキを展開し、急降下爆撃の体勢に入った。

狙うは、魚雷艇だ。

「高度3000！ 2500！ 2000！」

俺は高度を読み上げる。

米艦隊に、明かりが灯った。

対空砲火を開始するつもりだ。

「上、一つ！ 撃ッ！！」

二つの60kg爆弾が投下された。

すかさず、反転して離脱する。

俺が後ろを見たとき、轟音と爆炎が上がった。

「命中を確認！」

「よし、やったな！」

対空砲火をかくぐり、離脱する。

「魚雷艇みたいな小粒じゃなくて、戦艦のご真ん中に250kgでも落とせば、さぞかし痛快でしょうね」

「焦るなって、そのうち機会も来る」

その時の俺は、実戦経験もそれほど多くなかった。

この程度の戦果で浮かれ、敵機の接近に気づかなかったのだ。

「……ん？」

何か、エンジン音が接近している気がして、背後を振り向いた。そしてようやく、米軍のP-38『ライトニング』が、射程距離まで迫っていることに気づいた。

「こ、後方に敵機！」

刹那、発射音。

風防が割れ、俺の腕を弾丸が掠める。

頭の中に、お袋の顔が浮かび、俺は歯を食いしばった。

「後席、無事か！？」

中尉に声にはっと顔を上げると、P-38は俺達の上を通り過ぎ、宙返りして再度攻撃をかけようとしていた。

「い、生きておりま……！」

俺は言葉を失った。

月明かりに照らされ、操縦席が血に染まっているのが見えたのだ。

「P-38か……逃げ切れる相手じゃねえな」

痛みをこらえるような声で、中尉は言う。

確かにその通りだ。

双発のP-38は旋回性能が低いが、最高速度は日本軍機とは比べものにならないほど速く、『瑞雲』を200km以上上回っている。

「奴を墜とすぜ、鎚木……」

「し、しかし……！」

いくら相手の旋回性が低くても、『下駄履き』の水上機で真っ向からやり合えるとは思えない。

しかもこちらは、操縦士が重傷を負っているのだ。

「来る！来る！来る！」

俺は後部の旋回機銃を操作し、弾をばらまいた。

だが、そんなものが簡単に当たるくらいなら、戦闘機などいらな

「歯ア食いしばりな！」

中尉の声と共に、『瑞雲』は突如横転急降下した。

体をGが襲い、機体が悲鳴を上げる。

闇の中、このような急降下をするとは、相手も予想しなかったのだろつ。

P-38が頭上に見えたかと思うと、引き起こして後ろにつく。そして両翼の、20mm機銃が放たれた。光の槍のような弾丸の列が、P-38の主翼を真つ二つに折る。金属片が、蛍火の如く闇夜に散った。

愕然としている俺の方を振り返り、神崎中尉は言った。

「……………これで帰れるぜ。今度はちゃんと、見張っててくれよ」

……………傷を負いながらも、中尉はいつものように笑っていた。

……………

……………

……………

「……………帰還後、中尉は左足を切断した。俺は代わりに自分の足が無くなれば良かったとさえ思ったが……………あの人は義足をつけて、笑って復帰したよ」

「……………」

絹海は沈黙していた。

潜水艦と飛行機の違いはあっても、まだ実戦を知らない彼女には、想像を超えた内容だったのだろう。

「飛んでいるときのあの人は凄い。飛行機に乗っていないときとはまるで別人だ。数多の戦場で生き残ってきたからこそ、あの状況で笑えたんだ。要するに、度量が違っただよ」

絹海の体が、小刻みに震えていた。
そんなに衝撃的だったのだろうか？

「……凄いです。それが、歴戦の強者というもののですね」

彼女は笑った。

そしていつになく、力強い口調で言う。

「私も、そのくらいの度量を持った、立派な艦魂になれるように…
… 鈴木少尉や神崎中尉、みなさんの命を守るように、私の為せる
全てを為します！」

「……そうか」

絹海はどこまでも純粹。

そしてどこまでも、しっかりとした信念を持っている。
彼女は本当に、美しい。

「よし。なら俺も絹海のために、俺の為せる全てを為そう」

「鈴木少尉……」

神崎中尉なら、ここで抱きしめて口づけくらいはするかもしれない。

しかし俺は……どうもそういうのは苦手だ。

「頑張ろう、できる限りな」

「はい！」

……日本に明日は無い。
絹海も分かっているのだろう。

だからこそ、俺も絹海も、己の心に誓った。

「何もできない」と「何もしない」は違う。

連合軍に降伏するにしても、少しでも条件を有利にできるように。

せめて目の前のものだけでも、守れるように。

俺達は誓いを立てた。

が、しかし……

翌日、俺は思い知ることとなった。

……戦争とは、始まりだけでなく、終わりまでも残酷であることを。

……

二、 激戦の記憶、そして誓い（後書き）

絹海

伊号第四〇〇潜水艦の艦魂。

名付け親は鍋木四郎少尉。

極秘で開発された艦であり、また姉妹艦とも離ればなれとなったため、孤独だった。

そのため内気だったが、鍋木や神崎と出会ってから次第に明るい性格になってきている。

流水郎「さて、第二話でございます」

小夜「戦闘シーンが無いと寂しいからってことで、鍋木少尉の過去話を組み込んだ訳ね」

流水郎「うん、伊四〇〇潜は、実戦には参加しなかった潜水艦だからさ、史実に沿って書く以上はね」

小夜「ところで『瑞雲』ってどういう機体？」

絹海「愛知航空機の開発した『瑞雲』は水上偵察機ですが、翼内には20mm機関砲搭載、空戦フラップ装備、そしてフロートの支柱に急降下爆撃用のエアブレーキを備えた万能型の機体として開発されました」

流水郎「その性能は水上機としては傑出したものだったが、高性能を求めた故に開発が長引き、実戦投入されたときには活躍の場は殆ど残されていなかった。フィリピンや沖縄でそれなりに戦果は挙げたらしいけどね」

絹海「航空戦艦『伊勢』『日向』に搭載する予定だったのですが、果たせずに終わっています」

小夜「なるほどね。私も名前くらいしか聞いたこと無かったわ」

流水郎「もはや、水上機自体が時代遅れになってたしな。『強風』よりも地味な機体だ」

流水郎「さて、次回もどうかお楽しみに」

絹海「テスト近いから、更新遅れるかもしれませんけど（汗）」

流水郎「ちなみに、俺は『流水朗』ではありません。『流水郎』です。そこら辺宜しく」

三、 俺達の8月15日（前書き）

第三話です。

ウルシー環礁攻撃の前に、戦争は終わります。

三、俺達の8月15日

8月15日。

俺は愕然とした。

「無条件……降伏……！？」

日本政府が、ポツダム宣言を受諾したという知らせ。

小島兄弟は、俺の隣で号泣した。

神崎中尉は笑ってはいないが、全くの無表情だ。

確かにこれ以上戦争を続けても、何の意味も無いだろう。

しかし本土空襲が始まったとき……否、真珠湾攻撃のときから、既に敗北は決まっていたのかもしれない。

今は亡き山本五十六長官は、最後まで対米開戦反対だった。

そして戦争が始まってしまつと、せめて「短期決戦・早期和平」という作戦計画を実行しようとしていた。

今になって無条件降伏……では、一体何のための戦だったのか？

……いや、止めよう

フィリピンにいたとき、神崎中尉から生き残るコツを教わった。

常に冷静でいること。

飯はしっかり食うこと。

そして、考えるだけ無駄だということを知れ。

今は、国に帰れること、これ以上戦友を失わないで済むことを喜ばう。

そうするしかない。

だが、そう思えない者がいるのを思い出した。

「……中尉」

「ああ」

中尉は俺の肩に手を置いた。

「絹海の所に、行った方がいい」

……俺達が、初めて絹海と会った通路。

そこで、彼女は泣いていた。

中尉は一緒に来なかった。

「……絹海、戦争は終わった」

「……聞きました」

絹海は顔を上げる。

「……私、死ぬのは怖くないです。けど……」

敗戦国の兵器は、戦利品として接收されるか、処分される。
絹海もまた、同じ運命を辿ることになるだろう。

だが彼女の涙は、それに対するものではない。

「まだ……まだ何も……成し遂げてないのに……！」

「……なあ、絹海」

俺は絹海の手を取った。

色白の、小さな手だ。

「俺もな、お前と同じくらい残念だ。けれど少し、ホッとしている」

「……？」

絹海は、訳が分からないという表情で、俺の顔を見た。

「お前が、血に染まらなくて……よかったな、って」

「……私は、戦うために造られた存在です」

「それでもだ。それに、お前は俺の側で、笑っていてくれた。俺には……それだけで十分だよ」

「……本当に？」

尋ねる彼女に、俺は頷いた。

「ああ、本当だ。だから絹海……悲しまないでくれ。頼むよ」

俺がそう言うと、絹海は突然俺に抱きついた。そして、俺の胸に顔を埋める。

「絹海……」

「しばらく……しばらく、このままで……」

……俺は彼女の頭を、軽く撫でた。

絹海が泣きやむまで、俺はずっとそうしていた。

……

伊四〇〇は浮上した。

格納庫のハッチが開き、『晴嵐』が姿を現す。

本当に、美しい機体だった。

だがそれを見るのも、これが最後だ。

「2機を投棄した後、小島兄弟が飛ぶみたいだ」

『晴嵐』を海に射出、投棄することが決定されたとき、小島兄弟は泣きながら艦長に、最後にもう一度だけでいいから、『晴嵐』で空を飛ばせてくれと訴えたそうだ。

「まあ、艦長にもあいつらの気持ちが、分かったのかもな」

「神崎中尉は、飛ばなくてもよかったんですか？」

俺の問いに、中尉は笑って答えた。

「飛び立ったら、帰るのが嫌になっちゃうかもしれないだろ」

……神崎中尉は、『晴嵐』の操縦席に、自分のマフラーを入れ、風防を閉じた。

整備兵がエンジンを回し、翼を折りたたんだままで、晴嵐は射出される。

そして、大海原へと消えていく。

俺と中尉は、その後姿に敬礼を送った。

2機目も射出され、小島兄弟の機体が発進することとなった。

折りたたまれていた翼を展開、フロートを装着し、小島景太少尉が操縦席、正次少尉が後部座席に、軍刀を携えて乗り込んだ。

エンジンが回り、勢いよく射出される。

俺は何か、嫌な予感がした。

そして次の瞬間、『晴嵐』は数回旋回したかと思うと、双フロートを切り離れた。

『晴嵐』のフロートが取り外し可能なのは、潜水艦に積むためだけではない。

攻撃時にはフロートを増槽のように投棄して身軽になり、攻撃後は潜水艦の近くに着水、或いは落下傘で脱出して乗員のみを回収する予定だったのだ。

しかし、小島兄弟にはフロートを切り離さず、艦の周囲を短時間飛ぶことだけが許可されていたはずだ。

それなのに2人はフロートを捨て、どんどん高度を上げていく。

「あいつら、死ぬ気だ！」

2人は軍刀を持っていた。

飛びながら、自決するつもりだろう。

周りの奴らが騒ぎ始めた。

神崎中尉は舌打ちし、遠ざかっていく『晴嵐』を目で追っている。俺達の乗機は既に射出してしまったし、為す術は無い。

（馬鹿野郎……ここで死者が出たら、絹海がまた泣くじゃないか！）

……その時。

大気の流れが、変化したように見えた。

柔らかな、不思議なエネルギーが艦から立ち上り、空高く上がっていく。

まるで、月明かりに照らされて輝く、絹糸のような……

「！」

『晴嵐』が180度横転し、背面になるのが見えた。

そしてその操縦席から、2つの小さな影が落下する。

パラシュートが開き、それが小島兄弟であるとわかった。

「落下傘だ！ 脱出したぞ！」

「救助の準備、急げ！」

整備員や救護班が、慌てて用意を始める。

晴嵐は背面のまま雲間へと飛んでいき、見えなくなった。

「…… 楠木少尉…… 神崎中尉……」

ハッと振り返ると、格納庫の壁に寄りかかるようにして、絹海が近くまで来ていた。

顔色が青白い。

「絹海　！」

俺は慌てふためく周りを余所に、絹海に駆け寄る。
神崎中尉も来た。

「絹海……今のは、お前が……？」

「はい……」

絹海は、疲れ切った表情で言った。

「本当なら、飛び立った艦載機に……艦魂が力を及ぼすことは、禁じられているんです……。それを行うためには……私の命と魂を……削らなければならなかった……」

「なっ……！！」

彼女の手は、水のように冷たくなっていた。
生気が失われているようだ。

「そこまでして……お前は……！！」

「為せる全てを……そう誓いました……から……」

絹海は、美しい笑みを浮かべる。

俺はいつの間にか、絹海を抱きしめていた。
頬を涙が伝うのが、わかった。

「少尉……」

「君はもう、ただの兵器じゃない」

かける言葉が出てこない俺の気持ちを、中尉が代弁してくれた。

「人を殺すんじゃないで、人の命を助けた。殺すより助ける方が、ずっと難しい」

中尉もまた、泣いていた。

俺は絹海の体を強く抱きしめ、ようやく声を出した。

「その通りだ……お前は……最高の、艦魂だ……」

「……ありがとう」

絹海は、目を閉ざした。

「絹海……！？」

「大丈夫……少し、寝るだけです……」

……数秒後、絹海は気持ち良さそうに寝息を立てていた。

これが俺達の、8月15日だった。

⋮

三、 俺達の8月15日（後書き）

さて、これで戦争は集結しましたが、この物語はあと一話ほど残っています。

どうか次回も、お楽しみに。

ちなみに史実では、『晴嵐』は3機とも投棄され、本文の事件は無論架空のものです。

四、これから（前書き）

どうも、第四話です。

次回がエピソードとなります。

四、これから

……伊四〇〇に乗る前の、ある晩。

私は神崎中尉の後席ではなく、自分が『瑞雲』を操縦して夜間偵察に出ていた。

しかし電探を積んだ米軍夜戦の群に鉢合わせしてしまい、後部座席に乗っていた後輩が死んだ。

雲に逃げ込んだ私は道に迷い、しばらく暗雲の中を一人で飛ぶ。そしてそれを抜けたとき、下方には空襲で炎に包まれていく街が見えた。

燃料が無くなっていたので、しかたなく機体を捨てて脱出。落下傘でふわりと宙に浮かび、墜ちていく愛機と、その棺桶の中に残されている後輩の亡骸に、心の中で敬礼をした。

町外れの林の中に降り立った私は、すぐさま落下傘を捨てて、近くの基地に向かおうとしたが、その時周りに、竹槍や棒などを持った人間が集まってきていることに気づいた。

いずれも女子供、年寄りで、若い男はいない……即ち民間人だ。そして盛んに、「米兵だ！ 鬼畜米英だ！」と叫んでいる。

「違う！ 俺は日本兵だ！ 日本兵だ！」

私が必死で叫ぶと、なんとか声が届いたようで、彼らは武器を降ろし、近づいて私の顔を確認した。

その中に、１０歳くらいの子供がいた。

子供は私の顔をまじまじと見つめ、そして……。

「この……嘘つき軍人！！」

叫ぶと同時に、私の顔面を棍棒で思い切り殴った。

その痛みで沈んでいく意識の中で、私は知った。

自分たちは、英雄ではないのだ、と。

鬼畜米英から日本を守るために戦うはずが、戦を長引かせ国民を苦しめていたのだ。

基地に運ばれて手当を受けたが、その後私を殴った子供は見つからなかったのは、正直安堵した。

子供といえど、この時世に軍人を殴っては、無事では済まないだろうから。

艦魂が見えるようになったのは、この出来事が原因だったのかもしれない。

.....

誰もいなくなった格納庫。

その隅に毛布が敷かれ、絹海は寝かされていた。

「気分はどうだ？」

「あつ、鎬木少尉」

絹海が起き上がる。

まだ顔色は悪く、肩を貸してやらないと歩けない。
だがそんな状態でも、絹海は笑っていた。

「寝て無くていいのか？」

「はい、大丈夫です。小島少尉たちの方はどうですか？」

「軽傷だったからな。後は本人達次第だ」

絹海が命を削ってまで助けたのだ。

また死に急ぐようなことはさせない。

「また、あやとりでもやるか？」

「はい！」

絹海は嬉しそうに、赤いあやとりを取り出した。

これから内地に帰るまでの間、少しでも絹海には、楽しい思い出を残してやりたい。

俺達に今できるのは、そのくらいだった。

……そして、8月29日。

横浜の港まであと僅かというところで、伊四〇〇は米軍の駆逐艦に発見された。

魚雷も既に全部投棄され、それ以前に戦う権利すら残っていない。そのことを、神崎中尉が知らせに来た。

「少尉、中尉……」

絹海が体を起こす。

「絹海、無理するな！」

俺は言った。

彼女が、戦おうとしているのかと思ったからだ。

「肩を……貸してください。相手の艦魂に、会わなければならないから……」

俺達を安心させるためか、絹海は笑った。

俺は右から、中尉が左から、彼女の体を支える。

そしてそのまま、甲板へと出た。

そこではすでに何人かの同僚が、乗り移ってきた米兵に銃を向けられていた。

そんな中に、俺は1人の少女の姿を見た。

米兵の服装をして、手に一振りのサーベルを握った、青い目の少女。伊四〇〇に横付けしている、米駆逐艦の艦魂だろう。

彼女は同じ艦魂の気配を感じたのか、剣を構えつつこちらを振り向いた。

しかし、絹海の様子を見ると、少し目を見開き、数秒後に剣を鞘に納めた。

「……アメリカ海軍駆逐艦『ブルー』……これより貴艦を拿捕する。指示に従いなさい」

その言葉に、絹海が頷く。

続いて、神崎中尉が口を開いた。

「この娘は、体を悪くしている。格納庫で休ませておいてほしいが」

「……わかった。案内して。見張らなければならないから」

俺達は絹海の体を支えながら、再び格納庫まで戻る。

『ブルー』の艦魂は着いてきた。

どういうわけか、日本兵も米兵も、誰も俺達に気づかなかった。艦魂の力だろうか。

「ほら、絹海」

「ありがとうございます」

毛布の上に、絹海を寝かせる。

俺と中尉はその側に胡座をかいて座った。

「いてもいいだろ？」

「問題ない」

『ブルー』は中尉にそう答えた。

絹海は彼女の青い瞳を、じっと見ていた。

「……どうした？」

『ブルー』がそれに気づき、尋ねる。

「……綺麗な目だなあ、って……」

「綺麗……？」

絹海の答えに、『ブルー』は面食らったような顔をした。

「……私は、貴女の敵だ」

「あ、はい……そうですね」

絹海が苦笑する。

『ブルー』は調子を狂わされたらしく、目を逸らした。奇襲に成功したような気分になって、何故か俺も嬉しくなる。

「青い目、か……」

神崎中尉が言う。

「ほら、小学校に置いてあったアレを、思い出すねえ」

「ああ、青い目の人形」

「何ですか、それ？」

絹海が尋ねる。

「昔、アメリカの宣教師が親善のため、1万體以上のアメリカの人形を日本各地の学校に送ったんだ。日本も返礼に、市松人形をアメリカに送った」

「……そんなことが……あつたのですか……」

対米戦が始まってから生まれた絹海にとっては、信じられない話だったのだろう。

『ブルー』は無表情で、俺達を見ていた。

「戦が始まったとき、燃やされちゃったらしいけどね」

と、神崎中尉。

「えっ……どうして？」

「『この人形は米軍の間者だ』って、偉い人が言ったんだとさ」

「……人形がスパイ……？」

『ブルー』が眉を潜めた。

「……日本人は、全員馬鹿なの？」

「だろうな」

神崎中尉は笑って言った。

「でさ、ちょっと気になったんだが……あんた、何語で話してるんだい？ 最初はあんたが日本語を使ってるのかと思ったけど、よく見ると口と言葉が合ってない」

そう言えば、確かにそうだ。

今まで絹海のことには気を配っていたため、気づかなかった。

この観察力も、ベテランの証というものだろう。

やはり、俺はまだまだ中尉に及ばない。

「私が話しているのは英語。けれど言葉の意味を、脳みそに直接伝えられる」

「ほほう、便利だねえ」

俺も神崎中尉も、素直に感心した。

「私も、できるということは知っていたけど……実際に使うことになるとは、思いませんでした」

絹海が言う。

『ブルー』はしばらく、絹海の顔をじっと見ていた。

「……1つ、訊きたい」

そして、口を開く。

「カミカゼや、人間魚雷……あのような物を使ってまで、貴方たちは勝ちたかったの？」

……神風、か。

俺達がウルシーに向かって海中を旅している間も、本土に残った戦友たちの多くが、神風として散ったのだろうな。

彼らの魂は靖国へ行ったのか。それとも、家族の元へ帰ったのか……。

「偉い人たちは、勝ちたかったんじゃないか？　なあ、鎬木」

神崎中尉が、話を振ってくる。

「そしてその偉い人達はきっと、何の責任も取らずに生き延びることでしょっ」

一億総特攻だの玉砕だのと言って、兵士を死地に送ってきた上層部。

だが、責任を取って自ら腹を切るのは、利用されていた奴らだけだろう。

「……貴女は、どうなの？」

今度は絹海に尋ねた。

「勝ちたかった？ それ以前に、勝てると思っていたの？」

「誓ったんです。為せる全てを為す、って……」

絹海は起き上がって答えた。

「……無駄だと分かっている？」

「……貴女が私の立場だったら、何もできないからって、何もしませんでしたか？」

「……！」

その言葉に、『ブルー』は再び沈黙した。

「何もしないで終わるなんて、嫌だから……みんな、必死だったんです」

「……」

勝った奴には、負けた奴の気持ちは分からない。

落ちこぼれのひがみなどではなく、それは当然の真理だ。

だからこそ、絹海言葉は『ブルー』の心に強く響いたのだろう。

絹海は、あやとりを取り出した。

「……貴女も、やりませんか？」

輪になった赤い紐を、『ブルー』は怪訝そうに見つめていたが、絹海がそれではしこの形を作ると、納得したような顔をする。もしかしたら米国にも、似たような遊びはあるのかもしれない。

「ねっ、面白いですよ」

「……私、不器用だけど……」

躊躇いながら、『ブルー』は自分の手にもあやとりを出した。

「簡単ですよ。名人・楠木少尉が教えてくれますから」

「これこれ、おだてても何も出ないぞ」

……本当に、彼女たちは純粋な存在だ。
人殺しの兵器……物言わぬ鉄の棺桶に宿った魂。
それはあまりにも美しく、可憐な少女たちだった。

「……皮肉なもんだねえ」

中尉が言う。

「ええ、全くもって……」

私はそう答えた。

「何の話ですか？」

「なんでもないよ。さて、はしこの作り方だが……」

……その後、しばらく2人の艦魂と、1人の上官にあやとりを教えた。

このとき俺は、日本と米国が、いつかまた人形を送り合うような、仲の良い国になれるのではないかという、ささやかな希望を抱いた。

そして翌日。

我々は、横須賀港に到着した。

俺は中尉に促されて絹海を抱きかかえ、『ブルー』を伴い甲板に出る。

米兵に見張られつつ、他の乗組員達も降り始めた。

懐かしい日本の匂いが、風に運ばれてくる。

両親の顔、恐らくもう帰ってこないであろう兄たちの顔、生きていないかもしれない戦友達の顔が、次々と頭に浮かんだ。

「帰って……きたんですね」

絹海が、静かに言う。

彼女の未来については、もう考えるまでもない。

しかし彼女は、美しい微笑みを浮かべていた。

「『ブルー』さん、優しくしてくれて、ありがとうございます」

「……禁に背いてまで戦った者を、更に追い打ちするような趣味はない……それだけのこと」

絹海が何をやったのか、同じ艦魂には分かっていたようだ。
『ブルー』は俺達に背を向ける。

「……国に帰ってからも、練習する」

「え？」

「あやとり」

その言葉を最後に、『ブルー』は自分の本体である駆逐艦へと跳躍した。

蝶のような、優美な動きで着地し、そのまま米兵達の中へ姿を消す。
無口で素っ気ない女だったが、それは俺達が敵国だからだろうか。
それとも、母国でもそうなのか。

何にしろ、俺は彼女の今後の多幸を祈った。
そして……

「……絹海……今までよく、頑張った」

俺は絹海の頭を撫でた。

「戦争は……本当に終わったのでしょうか？」

「終わっちゃいないだろうな」

と、神崎中尉。

「そうだろ、鎚木」

「ええ」

俺は即答する。

「これからです。この国を立て直さなければ」

蹂躪され、焼け野原と化した日本。

この国を、美しく平和な国として復興させるまで、俺達の終戦は成り立たない。

それが俺達の、責任というものだ。

戦争を起こすのが人間なら、終わらせるのも人間だ。

「……残念です。私はもう、一緒に行けない……」

「……」

「けれど……」

絹海は、俺の頬をそつと撫でる。

「鈴木さんや神崎さんが、私のことを覚えていてくれる限り……私はいつまでも、貴方たちの側にいます」

「……ありがとう」

……久しぶりに見た日本の空は、前よりも広く感じられた。

…

四、これから（後書き）

エピソードの方は、明日か明後日に投稿します。
とりあえず、今日はこの辺で。

く未来へとく

鍋木四郎少尉、神崎政次中尉へ

私はハワイの辺りから、この手紙を書いています。

何年先になろうと、必ずお二人に届くと信じています。

米国土土に行った後、船体を調査されました。

米海軍の艦魂たちは真珠湾で仲間を失い、日本軍を怨んでいる人も多いけれど、みんな本当は『ブルー』さんみたいがいい人たちです。私と妹は世界最大級の潜水艦ということもあって、いろいろと気を遣ってくれました。

鍋木少尉に教わったあやとりを、米軍の艦魂たちともやりました。

あの戦争が、随分昔のことのように思えてしまいます。

なんで、戦争なんか起きたのでしょうか。

みんな同じ空の下にいて、同じ海を眺めているのに。

日本はあまりにも愚かで、米国はあまりにも残酷だった。

けれど、お二人が私と一緒にいてくれたから、私は今も幸せです。

あと数時間で、撃沈処分される今でも。

お二人のような方がいる限り、日本はまた、美しい国に戻れると信じています。

そして、世界中に平和な時代が来ると、信じています。

海の底へ着いた後も、ずっと見守ります。

絹海

.....

「……確かに、俺の祖父に宛てた手紙です」

青年が言った。

その服装から、訓練中の自衛隊員と分かる。

「もしかしたら、そなたがここに来るのを、知っていたのかもしれないな……」

木製の椅子に腰掛けた女性が、微笑みながら言う。

恐らくは艦魂だろう。

だがその姿には、他の艦魂には無い、得体の知れない『力』が感じられた。

「そなたの祖父は、元気か？」

「ええ、さすがに体力は無いけど、健康です。神崎の爺さんも、近所に住んです。車椅子が必要な体ですけど、飛行機乗りだった頃の度量は残ってますよ」

「そう……なら良かった。この手紙を預かった甲斐があったというものだ」

艦魂は優しく笑った。

「先の大戦、我々アメリカ軍は随分と非道な真似をしたようだ」

「日本も似たようなものです。祖父の知人の、小島さんという人から聞きましたけど、軍内部でさえ異常なまでに虐待行為が行われていたようですし……」

「私が初めて戦に出てから、もう二百年以上経った。それでも戦争は続き、より効率よく人を殺せる兵器が次々と生まれている」

「はい。けれど、俺は……」

青年も、微かに笑みを浮かべる。

「まだ、信じてみたいです。そうじゃないと、絹海さんに……祖父ちゃんの初恋の人に、申し訳ないですから」

「……うむ」

艦魂は頷いた。

「……未来を掴め。東から来た若人よ」

「はい。為せる全てを為します」

青年は非の打ち所のない敬礼をし、艦魂もそれに応じて敬礼をした。

「それでは、またいつかお会いしましょう」

「願わくば、友としてな」

……伊四〇〇型潜水艦。

壮大な『潜水空母』は、戦局に何の貢献もできずに終戦を迎えた、
というのが一般の見解である。
それは事実だろう。

しかし。

鉄の棺に宿った無垢な少女の存在は、それを見守った者達の心に強く残っている。

そしてそれは受け継がれ、

決して忘れ去られることはない。

……完……

く未来へとく（後書き）

艦魂座談会

流水郎「さて、この話もこれにて終了、と」

絹海「読んでくださった方々、本当にありがとうございました」

小夜「で、誰かゲスト呼んでるんだって？」

流水郎「おうよ。ではご登場いただきましょう。まず、潜水艦の話を書くきっかけとなった、黒鉄大和先生のイツヤ様です！」

拍手、そして入場。

イツヤ「……はじめまして。呼んでくれてありがとうございます」

絹海「わあ、伊五八潜の艦魂さんですよ。お会いできて嬉しいです！」

イツヤ「私も、最大の潜水艦にあえて嬉しい」

流水郎「そう、伊四〇〇型潜水艦は、原潜が開発されるまで世界最大の潜水艦だったのですなあ」

絹海「いえいえ、私なんて……大きいけれど実用性はいろいろと……ね」

流水郎「まあ確かに、イツヤ様の登場するお話に書かれているとおり、普通の潜水艦が『刺客』として運用されたのに対して、伊四〇〇型は攻撃機を搭載することを主目的としてましたからね」

絹海「『晴嵐』を発進させる時には、嫌でも浮上しなくちゃなりませんし、丁度米軍が日本軍の潜水艦に対する警戒を強化してきた時期ですから、8月15日まで無事だったのも奇跡的ですよ……」

流水郎（ちなみに米軍の警戒網が強化されたのは、イツヤ様のイン

ディアナポリス撃沈に起因する。ま、不要な話題だな）

流水郎「さて、続きまして……伊東先生の神龍様と、大和長官でございます！　」

神龍「こんにちは、神龍です！　」

絹海「わあ、神龍さん！　お会いしたかったです！　」

神龍「私もですよ絹海さん。前はゆっくりお話もできなかったし……」

小夜「……」

小夜の視線の先にいるのは、獲物を見つけた虎のような目で自分たちを見つめる、大和長官だった。

流水郎「あー、こりやまた荒れそうですね」

小夜「呼んだのは貴方でしょ！　何とかしてよ！　」

流水郎「はっはっは、俺に帝国海軍最大の戦艦を止められるわけがないだろう！　」

小夜「じゃあ何で呼んだの！　？」

神龍「大和さん、抑えてください！　」

大和「どいてくれ神龍……さもないと私は、お前ごと××××したり　　したり、ハアハアしたりしてしまう……ああ、考えただけで血圧が上がって……ふふふふふふふふふふ」

神龍「私も狙われているんですか！　？」

イツヤ「だ、駄目……私には一ノ瀬が……」

絹海「私にも鎬木少尉がいます！　だからそっちの道には……」
大和「安心しろ、君たちの男は、その程度で君たちを捨てるような真似はしないだろう。だから……さあ来い、私の胸へ！　」

流水郎「あー、これはどうなるのやら。ただ己の無力を思い知る

俺。……む、あの人は……？」

神崎「邪魔するよ、っと」

絹海「か、神崎中尉！？」

神崎「よう、大和ちゃん、会えて嬉しいよ。俺、神崎政次な。宜しく」

神龍「や、大和長官を、ちゃん付け！？」

大和「む……ま、まあ、宜しく頼む」

イツヤ「……さすがに戸惑っているみたい」

小夜「この人、とことん謎ね……」

神崎「なあなあ、海軍最大の戦艦ともなると、イけるクチなんだろ？　一杯やろうや、とっておきの大吟醸と、なんと100年物の古酒があるんだ」

大和「なんと、それは興味ある……だが……！」

神崎「あと俺が極秘に入手した、ドイツとイタリアの艦魂の写真集なんてのもある。いい肴になるだろ？　ちなみに俺のお薦めはこの、ヴィットリオ・ヴェネト級戦艦の……」

大和「おお！　こ、これは貴重な……！」

流水郎「おお、大和長官、食い入るように見ている……」

神龍「た、只者じゃないですね、あの中尉さん……」

絹海「とりあえず助かりました……ありがとう、神崎中尉」

神崎中尉、絹海にこっそり親指を立ててみせる。

イツヤ「……ところであのお酒……本当に大吟醸と、百年物の古酒？」

流水郎「さあ、ただのカストリかもしれませんね」

絹海「カストリって……大和さん、怒りませんか？」

小夜「ぶっちゃけお酒は二の次にして、肴の方に夢中だから、大丈

夫なんじゃない？」

神龍「とりあえず、これで落ち着いてお話しできますね」

その後、しばらく雑談。

神龍「それで、三笠二曹ったら……」

絹海「まあ、そんなことが……」

イツヤ「一ノ瀬は確か……」

小夜「あつ、それ荻堂さんと五十嵐さんもやってた！」

神崎「やっぱりさ、俺が思うにはドイツ海軍のポケット戦艦の艦魂は……」

大和「うむ、世界は広いな。……ハアハア」

流水郎「とりあえず楽しんでいるようで、何よりです。さて、今後のことですが、俺はまた戦闘機物を書いて、その後に艦魂物を書くつもりです」

絹海「どんな艦魂ですか？」

流水郎「俺以外に、多分誰も書こうとしないような艦魂」

小夜「こうして作者は、異端者の道を進むのです」

流水郎「我道探求者と呼びなさい。ちなみにその辺について、他の先生が妙な批判を受けたりしているようなので、俺の見解を申し上げておきますが……俺は文章へのアドバイスは歓迎しますけど、しかし自分の好みに合わないとか、そういう意見は一切無視させていただきます」

神龍「まあ、好みじゃなければ読まなければいいのですしね」

流水郎「そうです。他人の『書く権利』を侵害するのではなく、自分の『読まない権利』を守ればいいのですから」

イツヤ「ところで貴方……何処に住んでるの？」

流水郎「山梨。甲斐の国っすよ」

イツヤ「……海、無い」

流水郎「はい、俺も海を見たこと、数えられるくらいしか無いです」

イツヤ「でも、富士山がある」

流水郎「そう、晴れた日はいつでも見るができますよ。特に、雲の海の中から突き出るようにしてそびえ立つ富士山が大好きです、俺」

イツヤ「私も見たいな……。そういえば、世界遺産登録の話もあった」

流水郎「はい。でもゴミ問題とか、いろいろ壁があるんですよ。一番の問題は、自衛隊の演習場。世界遺産の近くで軍隊が射撃訓練しているとかいうのは、さすがにね……」

イツヤ「……復興しても、日本はいろいろ大変みたい」

流水郎「はい。けれど、戦争中にくらべれば、ずっとマシになっているはずですよ。だから我々は、もっと頑張れるはずです」

絹海「さて、そろそろお別れの時間ですね」

神龍「今日は楽しかったです。ありがとうございました」

イツヤ「……じゃあね、絹海さん」

絹海「はい、潜水艦同士ですし、また何処かで会いましょうね」

流水郎「あ、山梨名物・ほうとうセットをお土産にどうぞ。これから寒い季節だから、これで体を温めてください。カボチャの入ったほうとうは健康にいいですから」

神龍「わあ、ありがとうございます！」

小夜「また来てね。そっちのみなさんに宜しく」

神龍「はい！」

イツヤ「……ありがとう。さようなら」

ブルー「……作者」

流水郎「あ、何すか？」

ブルー「嫡木の孫に、絹海の手紙を渡した艦魂は、まさか……？」

「

流水郎「さすがアメリカの艦魂は気づいたか。そうです、『あの船の艦魂です」

ブルー「……抹殺決定」

ブルー、サーベルを抜く。

流水郎「待て待て待て待て！　！　何でそうなるんすか！　？」

「

ブルー「あのお方は、アメリカの艦魂にとって神に等しい存在。それをあのようなチョイ役に使うとは、万死に値する」

流水郎「わかってますよッ！　また戦闘機隊の話を書いたら、あのお方をメインにした話も書きますからッ！　」

ブルー「……分かった。なら待つてあげるから、早く書くように」

流水郎「は、はい！　……ああ、俺も他の先生方と同様、自分のキャラ達に尻に敷かれてしまう時が来るのかな……」

大和「もう我慢できない！ 神崎ちゃん、共に欧州へ征かぬか！？」

神崎「そうしたいところだけど……神龍さん達、帰っちゃったみたいだよ？」

大和「なにっ！？……仕方ない、私も帰ろう。また会おうぞ、神崎ちゃん！」

神崎「ああ、楽しかったよ、大和ちゃん」

流水郎「……ちゃん付けで呼び合ってるし……」

伊東先生、黒鉄大和先生、もしお気に召さないことがございましたら、伝えていただければすぐに修正いたします。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5262f/>

伊四 -為せる全てを-

2010年10月11日17時51分発行